

鉄-21世紀への夢

創立80周年記念懸賞作文入賞作品紹介 ⑥

日本鉄鋼協会では、創立80周年を記念して平成7年度に懸賞論文を募集しました。全国から寄せられた第1部（中学・高校生の部）195編、第2部（大学生・一般の部）187編のうち、選ばれた入賞作品について順次掲載します。

第1部 3等賞

すべてに優しい鉄を！

福山暁の星女子中学校1年

宮野 寛子

あなたは、「公害」というものを知っていますか。もちろん知っていると思いますが、公害とは、私やあなた、そう、多くの人々の生活や衛生にあたえる害です。その公害は、私の住んでいる広島県の福山市にもあります。「公害」なんて大きな声で言えない、本当にささいな、私だけ気にしている様な事かもしれませんが――。この福山市には、NKKという大きな製鉄所があります。天災地災もほとんどなく、海陸両面の輸送条件ができていて、芦田川という工業用水も多くあるこの福山に、NKKは30年前に建てられました。NKKは、この小さな町福山に、大きな希望を運んできました。それは「発展」という希望です。工業の発展は都市の発展です。NKKは人々の望み通り、福山をみごとに発展させました。工場に働く人が多く必要となるために人口が増え、それにしたがって、大きな道路がいくつもできたり、家やマンションが建ったり、商店が建ち並んだり、どんどん都市化が進んでいきました。

しかし、常に良い事ばかりがおこるものではありません。発展の見返りは、汚水・騒音・ばい煙。そう、「公害」です。工場のうるさい音、もくもくと空に上がる煙、そして、工業用水のための芦田川のせき止めです。「芦田川をせき止める」ということは、流れを止めるという事・そして水を川からくみ上げるという事です。流れが止まると、魚も少なくなり、土砂や小石が河口近くにたまり川が浅くなります。水をくみ上げると、どうしてもその後、使い終わっていらなくなってしまう水が出てきて、川にまた汚れた水をもどす様になります。すると、その時、少しの水の汚れでも川や海に流れる事になるのです。

「鉄」は私達にとって、とても重要で大切な物です。家庭の電気製品、冷蔵庫や洗たく機などは、ほとんどと言ってよいほど、鉄が使われていますし、交通に便利な、車や自転車やバスなども走る鉄です。だから「重要で、私もよく利用している鉄なのだから、公害なんてしかたがないだろう」と私は考えていました。

もし、あなたの目の前に、自分の利益のあるとても素晴らしい物があったらどうしますか。「こんなに素晴らしい物があるのだな。私もほしいなあ。」誰もがそう感じると思いま

す。しかし、そのすばらしい物の内部の见えない影の所に、危険でよくない物があったらどうしますか。「まあ、見えなからいいや」「どうせ、なんとかなるんでしょ」とか、ひどい場合には、気付かないという事だってありえるのではないのでしょうか。それに、もし目を向けたとしても、誰がこの危険物を、どの様にしたらよいのでしょうか。

公害とは、この話にピッタリ当てはまると思います。危険物には、自分の身になにかあってから目を向ける。それではおそいのです。しかし、分かっているながら、私の場合はこの危険物に対して、見て見ぬふりをしていました。

「昔の芦田川は、そりゃあもう、きれいだったぞ。夏には、毎日の様に泳いでいたもんだ。」

父はよく、昔の芦田川の話をしつゝ。家が芦田川の近くだったせいか、父は、芦田川でよく遊んだ様でした。NKKができて間もない、いや、NKKができる以前の、父の子供の頃の話です。

「木でいかだなんか作って、友達と魚つりなんかもやったっけなあ。そうだ、あさりなんかも取れてたぞ。」

父の昔話を聞いていると、美しい流れ、澄んだ水、そんな芦田川が目に見えられます。しかし、今ではどうでしょう。よごれきった水で、魚なんて一ぴきもいそうにない。こんな芦田川に一番大きなショックを受けたのは、小学生の高学年ぐらいの時でした。

父と私と弟の三人で、休日、芦田川にそってドライブをしていました。下流の方へ下流の方へと行き、ふと父が、川をすぎてもう海になった所の海岸ぞいへ、車を止めました。砂はまには、小さなカニが穴から穴へサササッとす速く動いています。私は海岸におり、ハッと気付きました。遠くではよく見えませんが、近くへ来てみると、海の色が変な色になっているのがはっきりと分かりました。よごれた海に混って、青や緑の油みみたいな液体がプカプカと浮いていたのです。

「この、青や緑色をした物は何なの？」

私が海を指さして父に聞くと

「工場の何かの液体かなあ」

と父は答えました。そしてポツリと、

「この海もずいぶんよごれたな」

と言いました。ああ、この海はこんなに汚れているんだ。なぜだろう。やっぱり工場のせいだろうか。私は何もできないのだなあ。私は海を見ながら、様々な事を頭の中でぐちゃぐちゃにしていました。

「おーい、帰るぞー。」

父が呼びかけました。そして車へ――。

私はその時、車に乗って帰ったのです。車は鉄でできた乗り物です。あの時はあまり深く考えませんでした。もしかしたら、私の乗っていた車は、NKKで造った鉄でできていたかもしれないのです。本当は、この海をよごしたのは私かもしれないのです。

「鉄は大切なもの」と私は最初の方で書きましたが、今でもその考えは変わっていません。私の体の中にも4～5グラムぐらいの鉄があるのですから、鉄は人の命にとって、大切な働きをしていると言えるのです。しかし、鉄を造るのと同じ様に、いやそれ以上に、地球の環境は大切なのです。

私は、この作文を書くにあたって、製鉄所が、環境を守るためにどんな対応をしているのかを知っておかなくてはいけないと思い、少し、自分自身で調べてみました。そして、ど

この製鉄所も、よくよく環境の事について考え、接しているのが分かりました。鉄をひやしたりするのに使った水は、できるだけ再利用したり、工場の周りに花や木を植えたり、煙も、有害な物をできるだけ取りのぞいて空気中に出したり、環境に対する努力はすごいなあと感じました。どんなものでも、完璧なんてとてもむずかしい事です。そんなに簡単にできる物ではないと思います。でも、そのむずかしい事に一步步近づいていこうとしている。私には、それがとてもすばらしく思えます。

私は、鉄にたすけてもらっている人間の一人ですから、そんなにえらそうな事は言えないと思います。しかし「鉄には夢がある」「鉄には未来がある」のだったら、より良い夢や未来の方がずっとずっといいと思います。経済性にも、機能性にも、信頼性にも、そして環境にもよりよい「鉄」。むずかしいからこそやりがいがあり、鉄だからこそこんな大きな夢ができるのだと思います。

私達は、「鉄」というすばらしい物を造ってきたのだから、今度は、よりよい鉄の大きな夢を現実にしていければ……すべてに優しい鉄を！

第2部 特別賞

夢は「鉄の村」作り

東京都田無市

朝吹 美恵子

市民グループ「黒鉄会」、ただいまメンバー10人なり

私は東京の片隅で小さな「黒鉄会」という市民グループのメンバーだ。実はこの会は去年、砂鉄から鉄を作ってみる「たたら製鉄1日体験教室」を行うために、たった2人で始めたものだった。それがきっかけとなり、とびっきり好奇心の強い物好きな人間が集まって、今では10人の会になっている。会員の中には、拾ってきた砂鉄で鉄ができないかと考えて、アルミの鍋に砂鉄を入れ、家庭のコンロの上に乗せてみたら鍋に穴があいてしまったという奇人もいる。しかし、これがきっかけで鉄に関する本を読みだしたそう。

今、私たちにはたくさんの計画がある。鉄に関することなら何でもやってみよう、勉強してみようと皆意気込んでいる。ここでは、私が「鉄」に興味を持ったきっかけ、一般参加者を集めてやった「たたら製鉄」のこと、それから今後の計画と夢を話したいと思う。

一冊の本との出会いが招いた鉄の世界

だいたい私は中学、高校の時には物理とか化学とかが大の苦手、化学記号を見ると頭痛がする種類の人間だった。と

ころがある日、新素材の鋳鉄で製品を作る鋳物の会社のパンフレット制作の仕事が舞い込んできた。実は私はグラフィック・デザインの仕事をしており、こういう印刷物の企画を立てたり制作をしたりする。仕事きたときは、頭痛を乗り越えて頭の中は空白状態になった。これは困った。しかし、何とかしなければならぬ。そこでとにかく本屋に行った。そして書店の本棚からやっと見つけて買った1冊の本、これが後に私の世界を大きく変えてくれることになる。それは中澤護人氏の「鉄のメルヘン」(アグネ社)だった。

もちろんずぶの素人には何が書いてあるのやら、肝心な内容はその時にはトントわからない。しかしそこには科学の発達の裏に、1人1人の科学者の精神の軌跡があった。これが私の心にドンと飛び込んできた。失敗しても失敗しても試み続ける実験、生活苦と戦いながら夢の実現に熱意を失わない研究者、そしてそこにはあえなくも不遇の生涯を終えた科学者の姿もあった。

現在の私たちの生活には普段、気が付かないくらい鉄の製品があふれている。今やあたりまえすぎて、空気を意識しないように鉄の存在も取り立てて感じなくなっている。しかし